

## —— 民間研究所めぐり ——

### 北興化学工業(株)開発研究所

神奈川県中央部、大山を中心とした丹沢山塊を近くに望み、となりに相模川が流れ、平塚市と厚木市を結ぶほぼ中間に位置する神奈川県厚木市戸田に、当社の開発研究所はある。

この研究所の生いたちは、昭和29年秋、鎌倉市大船に化学・生物部門を併設した中央研究所として発足したことに始まる。昭和36年に、厚木市戸田に試験農場を開設、つづいて昭和41年同地に研究所を移転し、安全性部門を拡充するとともに昭和47年に開発研究所と改称し現在に至っている。

農場は、全国に4試験農場を設置しており、その各々は、研究所内に併設している厚木試験農場、静岡県相良町と富山県立山町にある茶、果樹を中心とした試験農場、および北海道長沼町にある寒冷地での試験のための実験農場である。

研究所には、①新農薬の合成研究、②農薬製剤・新剤型の研究、③微生物源農薬およびバイ

オテクノロジー関連研究、④殺菌・殺虫・除草・PGRの農薬スクリーニング試験、⑤温室・圃場での試験研究、⑥毒性および残留・代謝試験を行う安全性研究の各部門があり、「低薬量で効果がすぐれ、安全性が高く、環境面へのインパクトの少ない、経済性にすぐれた農薬」の創製研究に取り組んでいる。

当研究所では、農薬合成研究とともに、早くからバイオ研究にも着手し、その成果として農業用抗生物質カスガマイシンを開発、昭和41年には稲いもち病防除剤として発売した。その後の成果としては、フェノチオール(除草剤)、ベンレートTの開発(種子消毒剤)、オルトランの開発(殺虫剤)、オリゼメートの共同開発(殺菌剤)、プッシュおよびセスロンの開発(水稻除草剤)などがある。

さらに、カスガマイシンの開発を通じて培った微生物を取り扱う技術が基盤となって、先端技術としてのバイオテクノロジー研究への取り組みも積極的に行っている。その一例として、植物組織培養技術を応用した除草剤耐性稲の作出や昆虫の培養細胞による多核体ウイルス(バイオ殺虫剤)の量産などの実用化研究が着実に

進行している。

新規剤では、水稻種子消毒剤「ヘルシード」の開発、および稲、麦、広葉作物用の生育期処理除草剤と果樹用



殺菌剤の開発試験を国内外で積極的に進めている。

昭和62年に初めてマイナス成長を示して以来、農業ビジネスはその後も厳しい環境条件下に置かれ、農業開発の将来予測はますますむずかしくなっている。かかる状況のなかであって、

現在商品化研究の途上にある薬剤については、総力を挙げ短期決戦で仕上げ、またこれから着手するものについては、中長期的な観点に立って、従来とは異なる新薬開発の方法や、新技術の創製が必要となってくると思われる。

## 植 調 協 会 だ よ り

### ◎ 人 事 異 動

平成元年3月1日付

任 十勝試験地 嘱託

須賀忠夫

平成元年4月1日付

命 研究所第二研究室長代理

立野篤男

命 研究所第三研究室長代理

横山昌雄

命 研究所化学研究室長代理

権田重雄

任 研究所 技師

下川英仁

任 熊本試験地（新設）嘱託

山口 隆

平成元年4月20日付

任 鹿児島第一試験地（新設）嘱託 湯田保彦

財団法人 日本植物調節剤研究協会

東京都台東区台東1丁目26番6号

電話 東京(03) 832-4188 (代)

平成元年4月発行

植調第23巻第1号

定価 412円 (送料175円)  
(本体400円, 消費税12円)

編集人 日本植物調節剤研究協会会長 吉沢長人

発行人 植調編集印刷事務所 広田伸七

東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会

発行所 植調編集印刷事務所

電話 東京(03) 833-1821 番(代)

ノビエからホタルイまで

好評発売中

水田初期除草剤

**ショウロンM<sup>®</sup>粒剤**

®: エス・ディー・エス バイオテック 登録商標

特長

- ☑ ホタルイに卓効
- ☑ イネに安全
- ☑ 適用地帯が広い
- ☑ 高い安全性

ショウロンM普及会

クミアイ化学工業株式会社      三井東圧化学株式会社  
株式会社エス・ディー・エス バイオテック      三井東圧農業株式会社